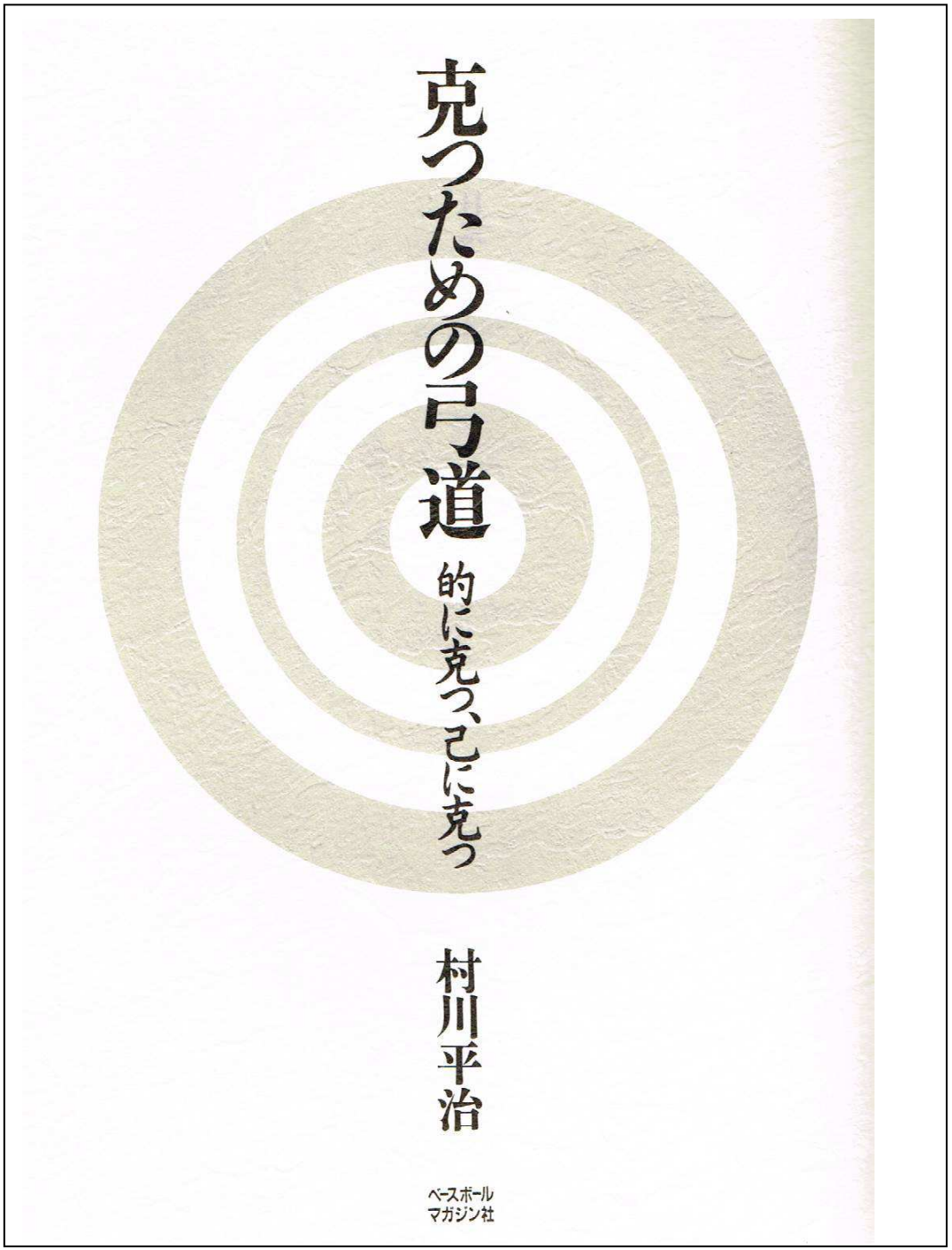

村川平治著「克つための弓道　的に克つ、己に克つ」（ベースボールマガジン社、一九九七年六月刊）

著者は、初出場した昭和五十二年全日本選手権で二十四射の射詰の結果勝者となった。幼年時代から弓に親しみ、好的中率を目標とし、出場試合で次々と好成績を収め、国体出場も果たした。しかし、全日本選手権の決勝を見、中ることがすべての国体の射と選手権の射とはまったく別のものであると感じた。自身を振り返り、的中率に囚われ、ともすれば中りが欠点を隠してしまう「小さな弓」であることに気がつき、目標を全日本選手権出場とし、それまでの中りへの拘りを捨て、基本に立ち返り射法八節に則った弓と闘う射であり、迫力があり、かつゆとりのある「おおきな弓」を目指した。

全日本選手権初出場發優勝の後も絶えずより大きな弓を目指すことで平成元年、平成七年、計三度の選手権優勝を成し遂げた。

本書は、著者の修行過程を明らかにし三、四段の中級者向けの指導書ということである。

また、著者は、東京都第一地連指導員であり墨田区弓道場で指導にあたっている由。

因みに、弓友会第九回生の夏目政夫さんは、東京都弓道連盟第一地区の墨田支部に所属し研鑽を積んでいる。

二〇一三年十一月三十日　　井田　晃記

刊行に寄せて
全日本選手権決勝二四射の射詰　川村光良　7

第一章　父、平左衛門の隠された意志　11
一、的場が遊び場　12
二、青少年への弓道指導　16
三、当てる楽しさ　21

第二章　「弓こそ我が人生」青春の旅立ち　25
一、本格的修業へ　26
二、窪田真太郎先生　30
三、念願の国体へ　36

第三章　「小さな弓」から「大きな弓」へ　43
一、国体はもう飽きた　44
二、全日本選手権をめざして　50
三、初の全日本選手権優勝　56

第四章　果てしない射型への挑戦　65
一、長かったブランク　66
二、二度の目の優勝　72
三、三度の目の優勝　79

第五章　私の射法八節　87
◎足踏み――からだを一本の木に想定する――　92
◎胴造り――両足の腿の付け根を前に張る――　94
◎弓構え――手の内の時点で十文字をつくる――　96
◎打起し――羽引きは打起しの流れの中で――　102
◎引分け――大三で切らず会まで一連の動作――　104
◎会――弓手と妻手がさらに伸びる気持ち――　108
◎離れ――肘を斜め後ろに流す――　112
◎残心――縦線から両手が一文字に開く――　114

第六章　弓具の選び方、扱い方　117
◇弓　弓の選び方／裏ぞりの調整／弓の癖／手入れ、修正　118
◇矢　箆張りの固さ　123
◇弦　弦の張り方　124
◇弾　弾のつけ方／弾の手入れ　125
第七章　弓は生涯修業　127
一、私の指導法　128
二、常にもうひとつ上の射をめざして　146
三、夢は「村川流」弓道場　151
あとがき　156